東奥日報2026年10月24日(土)付掲載

つなぐ 私たちの祭典 ② ――2年目を支える

青い海と森の音楽祭 10/31―11/8

木工品「ブナコ」とコラボ

「青森産」グッズ 温かく



ブナコミュートへのこだわりを語る倉田社長㊨。左は音楽祭メンバーでトランペット奏者の山川永太郎さん、中央はミュートの開発を監修した小林鴻さん

今年の青い海と森の音楽祭には、木工品の「ブナコ」が新たに加わった。公式グッズの製品が販売されるほか、一部公演では出演者がブナコ社（弘前市）開発のトランペットミュート（弱音器）「ブナコミュート」を使って演奏予定。県産ブナ材から生み出されたブナコたちが、音楽祭を優しく彩る。

音楽祭への〝仲間入り〟は同社の倉田昌直社長が「自信作」であるブナコミュートを公演で使えないか―と、実行委員会に打診したことがきっかけ。同じ時期に公式グッズの開発を進めていた実行委が倉田社長に協力を依頼し、グッズ3種類の制作とミュートの提供が決まった。

「メイド・イン・アオモリ」にこだわる同社。倉田社長は「地産地消」を掲げる音楽祭のコンセプトに共感したといい、友人であるアーティレクター・森本千絵さん（三沢市出身）が音楽祭ロゴを手がけたことにも縁を感じたという。

販売する公式グッズは栞（しおり）とボウル、ティッシュケースの3商品。同社が重要視するのはオリジナリティー。グッズの一つ「Sボウル」も、音楽祭に協力する青森公立大生を西目屋村の工場に招き、学生が作ったブナコのボウルをそのままの形で商品化した。ボウルの縁を一部変形させた「ほかにはない形」（倉田社長）として採用した。

ブナコミュートは試行錯誤を繰り返し約1年をかけて開発した。同社のスピーカー開発技術を応用したものだが、微調整で大きく音色が変わってしまうため繊細な作業が求められた。「うちは『諦めない』がポリシー。相手が納得するまで作る。ほかの会社ならやめているかも」と倉田社長は笑う。

公式グッズは「音楽祭のロゴが入っていて記念になる。大切に使ってくれたら」（倉田社長）。自身は11月6日の弘前市での公演を聴く。大舞台でブナコミュートの音色が響く瞬間を心待ちにしている。（秋村有香）

無断での複製・転載・生成AI利用を禁じます